
魔王とお母さんと私

七支

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王とお母さんと私

【Nコード】

N7924U

【作者名】

七支

【あらすじ】

ある日部屋でくつろぐ私の前に現れた青い髪の男は何者？ おかーさん、コレどうしたらいい？

女子高校生とその母と異世界から来た男のゆるいコメディです。

1（前書き）

中編予定。

まったりペースで更新します。

噂に聞く異世界トリップですよ！

いやー、ホントにあるんだねえ。

私は目の前に現れた男をまじまじと見つめた。
とある日曜日。

自宅の二階、自分の部屋で寝ころんで漫画を読んだら、目の前の畳が青白く光って、なんか丸い模様っていうか、いつかアニメで見た魔法陣みたいな模様が浮かんだと思ったら、いきなりこの男が現れたのだ。

背は高いけど体の厚みはなくてひょろつとしてる。でも態度というか、存在自体が偉そう。髪の毛はなんと青色だ。俯いてて目の色は分からないけど、長い睫毛まで青いのは見て取れた。ずるずるした布の多い服を着て、魔除けみたいなアクセサリをじゃらじゃらいつぱい着けて、杖まで持っているから魔法使いかな。元の世界では王族だったりしたら王道って奴だね！

にやにやしながら眺めていたら、顔を上げてきよろきよろと辺りを見渡した男が口を開いた。青い睫毛に縁取られた瞳は琥珀色っていうか金色だった。もちろん美形だ。やばいよ、なにこれ。腹が割れるまで笑ってしまいそう。

「その子ども、ここはどこだ。領主のところへ案内せよ」

「領主？ って、そんな人知らないよ。見たこともない。ここは私の部屋だよ」

「領主を知らないだと？」

驚いたように目をむく男に私は頷いて見せた。あ、この男、私のこ
とよっぽど無知な子どもだと思ったんじゃないだろうか？ 違うよ、
いないんだよ、領主なんて。

現代風に言つと市長さんとかなのかな？ でも、平凡な女子高校生

である私はどうやったら市長さんに会えるのかなんて知らない。よく、インターハイとか全国大会に行く部活の子が挨拶に行ったりして聞くけど、私に全国レベルの才能はない。

市長さんレベルの人の会い方も分からないんだから、まさか、総理大臣とか天皇陛下とか言わないよね？

「ていうか、靴脱いでよ。日本の家は土足厳禁なんだよ」

「……まあいい。では、お前が知る一番の権力者の元へ連れて行け」私の頼みは華麗にスルーして命令されたので、私はひとつため息をついて、我が家の権力者、お母さんのところに案内することにした。正直、初対面で偉そうな奴の言うことを素直に聞くのは嫌だったんだけど、そこは異世界トリップだし、小さいことにこだわって脱線してたら話が進まないからね。

ていうか、現代人が異世界に行ったら勇者とか巫女とか役目があるけど、向こうの人がこっちに来たってやること無いよね？ 何の用なんだろう。

部屋を出て階段を下りていると、後ろの男は「使用人通路にしても狭いな」とこぼした。

お約束かもしれないけど、むかついても仕方ないよね！ これはね！ いつか階段踏み外せ！ いや、今は私が先に立って降りてるから踏み外したらダメだけど。いつか！

で、今あったことを正直にお母さんに言うと、男は靴を脱がされて座敷に正座させられて、よそのお宅を訪問するときの心得を説教されていた。

うちのお母さん、そういう所敵しいんだよね。

ていうか、髪の毛が青かったから不良と思われたんじゃないかな。お母さんにこつてり絞られてしょんぼりした男は、夕食と一緒に食べると（箸は下手だった）あっさり上機嫌になってどこかへ帰っていった。

そつえば、名前も目的も全然聞かなかったなあ。

お母さん、私と違って小さいところにこだわって脱線しまくりな
イブだから。

また来るって言ってたけど、どうやってアポ取る気かな？

朝起きたら部屋の姿見に何か文字が浮かんでいました。

ミミズがのたくったような、日本語でもアルファベットでもない文字なのに、なぜか意味は分かるという不思議さ。

姿見はこの間青髪美形が出てきた畳の前にあるから、まあ、その関連なんだろうな、というのは単純な推測だけど、他に心当たりは無いからそれ以外だった時のほうが怖い。

「お母さん、ちよつと来て！」

階下で朝食の準備をしているお母さんを大声で呼ぶ。

朝から大きな声を出さないの、ご近所に恥ずかしいでしょ、なんて小言を言いながらやってきたお母さんに、姿見に浮かぶ文字を見せた。

「読める？」

「どうしてかしらね、読めないのに読めるわ」

首をかしげるお母さんを見てお伺いを立てる。

「どうする？」

鏡に浮かんだ文字は、先日お母さんが説教かました、よそのお宅を訪問する時の心得その一によるところのアポイントメントではなく、一方的な通達だった。

——本日、午後二時に行くので準備をしておくように。

署名らしきミミズがのたくった文字が添えられているけれど、そっちは読めなかった。これまた不思議だ。文字に込めた意思を通じさせるための魔法は固有名詞に弱いのか、それとも別のこれまた魔法的な何かなのか。

魔法だって。ぷぷ。

笑っちゃうけど、でも、目の前にあるんだから仕方ない。

もしかしたらものすごいオーバーテクノロジーなのかもしれないけど、青髪美形の服装や雰囲気からして魔法って言ったほうがしっくりくる。

しかし、今日の二時とは。

「私、授業が終わって速攻帰っても二時は無理だよ？ ていうか、塾あるし」

「そうね。お母さんも今日は遅番だから無理よ」
「ですよー」。

一日——青髪美形が来た日——は日曜で、たまたま外出の予定が無くても家に居ただけ、今日は平日だもん。お母さんは白衣の天使こと看護師だから、お休みは変幻自在だ。今月はたまたま日曜が休みってだけで、その休日も呼び出しがかかることもよくある。

でも、今日は都合が悪いってのはどうやってたら向こうに伝わるのかなあ。

とりあえず机の上に置いてあったルーズリーフにサインペンで「今日は都合が悪いからダメ！」と書いてみた。

「これだけでいいと思う？」

ぴらりと掲げて見せると、お母さんはそれを受け取って、私の丸っこい字の下に几帳面な文字で「五日後の十四時なら都合がきます」と書いた。

二人で頷きあって文字を鏡の表面にくっつけるようにセロテープで貼り付けた。

「これで通じると思う？」

「画像が向こうにつながるかどうかっていうのと、日本語の意味が通じるかどうかっていうのがあるからねえ」

二人で首をかしげたけれど、鏡はうんともすんとも言わない。当然か。

「もし通じてなかったら、今日の二時に来るんだよね？ ここに」

「この間は畳から湧いて出たんだっけ？」

「うん、ここらへん」

「じゃあ、何か置いて塞いでおきましょう」

お母さん鬼だね！　って言うべきか、その発想無かったお母さん天才！　って褒め称えるべきか。

私が口を開く前に、お母さんは物置から折りたたみのガラステーブルを持ってきてそこへ置いた。

「透明なら分からなくて頭打つかもしいないでしょ？」

うふふ、とかわいらしく笑うお母さん。つまり怒ってるんですね、分かります。

「さすがお母さん！　すごい！　私全然思いつかなかったよ！」

褒め称えらとお母さんは照れたように肩をすくめて、「早く準備しないと遅刻するわよ」って言い置いて部屋を出て行った。

お母さん、その忠告は二十分前に欲しかったです！

塾が終わって帰ったら、ガラステーブルの裏側に何者かの顔型がくつきり残っていてビクツてした。

……今度、おわびに洗顔料と油取り紙あげようかな。

そして、再びの日曜日ですよ！

あの顔拓事件の夜、ガラステーブルをお母さんに見せて二人で笑った後ふと気付くと、怒り狂ったメッセージが鏡に浮かんでいた。全身が映るサイズの姿見いっぱいに浮かんだ怒りの文句に乾いた笑いを浮かべつつ斜め読みしていたら、なんと浮かんだ文字がスクロールして続いてて、異世界人というのはケツの穴ちっちええんだなあ、とうんざりした。

それでもまあ一通り読むのが義理つてもんかと思って読み進めると最後の最後に小さい文字でこちらからのコンタクトの方法が書いてあった。

——紙にそちらの言葉で伝達事項を書いて、文字を書いた面を鏡に貼りつければ、こちらで転写して翻訳してやる。

って、私とお母さんがやった方法じゃん！ 最初からそう設定しておいてよ！ ていうか、してやるってなにさ！ させていただく、でしょうが！

うがあ、と叫びそうになったけど、夜に叫んだらご近所迷惑だって怒られるから我慢して隣を伺うと、お母さんは「あらあら」なんてにつこり笑ってルーズリーフに「迷惑ですから二度と来ないで下さい」って書いて貼ろうとしていた。つまりすごく怒ってるんですね、分かります。

でもさ、異世界トリップだよ？ 細かいことにこだわって話が進まないどころか話が始まらないのはつまんないよね！ 女子高校生のたしなみとして、チートとか逆ハーとかに興味あるんだもん。

「ねえねえお母さんお母さん。外人さんなんだから、こっちの礼儀

にうとくても仕方なくない？ わざわざ来るって言うんだから、話ぐらい聞いてあげてもいいんじゃない？」

「……でもねえ、年頃の娘の部屋に湧いて出る男を阻止するのは母親の務めじゃない？」

「それ、湧いて出るの意味が違うと思うよ……」

「すいませんねえ、彼氏の一人も連れ込めないふがない娘で！ でも、異世界トリップだったらモテ期到来かもしれないじゃん。

「娘の恋愛チャンス潰す母親ってどうかと思うよ。お母さんだって、娘がモテた方がいいでしょ！」

「お母さん、あんな青い髪の息子は嫌だわ！」

「私もアレはないと思うけどさ、でも、話も聞かずにシャットアウトは無いんじゃない？」

「……まあ、この部屋に湧くんだから、あなたがいいって言うなら反対はしないけど」

でも、男の子が来るんだったら気合い入れて掃除しなさいね、なんてヤブヘビな注意を受けて、それでもなんとかお母さんの許可を取った私は必要事項を書いて鏡に貼り付け、次の日曜の約束を取り付けたのだった。

そして日曜日の午後二時ちょうど、件の畳の前でなんとなく正座して待っていると、目の前の畳が青白く光って魔法陣が浮かび、見覚えのある男が現れた。

うん多分、先週の人だと思う……正直、青い髪とズルズルした格好のインパクトが強くてあんまり顔は覚えてなかったんだけど、睫毛まで青いもん、この人だよな。

「……」

「……」

相手からの挨拶を受けてから何か言おうと思っていたので、ついつい無言で見つめ合ってしまった。何だこの空気。

「お邪魔します、は？」

「なんだと？」

「挨拶して。それから、靴脱いでよ」

「我に命令するか、人の子よ」

なんか、この間も思っただけど、偉そうでやな奴だなあ！ もう帰れ
って言おうか一瞬考えたけど、下でお母さんがお茶の準備してるか
ら我慢する。私が呼ぶって言ったのに、話もせずに追い返したら叱
られる気がする。

「ま、とりあえず、ようこそいらっしやいました」

相手が無礼だからってというのは自分が無礼を働く理由にはなりませ
ん、というお母さんの教えを受けて育っているので不本意ながら頭
を下げると、青髪男は満足そうに笑って「案内せよ」と言った。偉
そうな態度にむっとしたけど、こっちが下手に出るだけでこんなに
ご機嫌だなんてチョロそうだからいいか、と思い直して、でも断固
として靴を脱ぐように言っ、階下のお母さんのところへ案内した。

3 (後書き)

次は話が動くと思います。

いきなり難しい話をされましたよ！

肅々と座敷に案内してお茶を出すと、青髪男は湯飲みにも手もつけず、いきなり頭を下げた。

なに、手みやげ忘れたお詫びなの？ と驚く私を無視して、彼はお母さんに「力を貸して欲しい」と告げた。

もしかして、これは異世界トリップにありがちな勇者フラグ？ と思いついた私がにやにやするのを尻目に、青髪男は「我は魔王『ほにやら』だ」と名乗った。

『ほにやら』部分は本当に『ほにやら』としか言いようがないんだけど、とにかく由緒正しい日本人には発音できないような音だった。

「ほ、ほにやら？」

「違う。『ほにやら』だ」

一生懸命似た音を出したつもりなんだけど即座に否定された私を見て、お母さんはにこりと笑った。

「私たち、お名前はうまく発音できないみたいだから、魔王から取ってマオと呼ばせて貰うわね」

「そうだね！ ほにやらとか、練習したって一生無理っぽいし！」
猫を飼ったら付けたい名前だったねそれ！ マオって呼びたいだけなんだね、お母さん！ とは口に出さずに尻馬に乗ると、青髪男改めマオはむむむ、と眉間に皺を寄せ、いきなり私のあごを掴んで口を開けさせた。ふがっ？ なにこれ乙女の危機？ お母さん助けて！ とみがく私のあごが疲れてよだれが出そうになるまで咽を覗き込み、それからおもむろに仕方がないと頷いた。

「原始的な咽の形状だから『ほにやら』の発音は無理だろう」

「……それで、マオは何の為に力を貸して欲しいの？」

親から貰ったこの体を羞恥プレイの末原始的なんて言われてむかついたけど、細かいところにこだわってたら話が進まない。ここはひとつ、オトナのオナナのヨユウってやつで、なんとか話を元に戻すと、マオはちらりと私を眺め、お母さんに向かってもう一度頭を下げた。

「こちらの世界に、魔族の移住を受け入れて頂きたい」

「は？」

あれ？ 勇者は？ 巫女は？ 花嫁は？ 異世界トリップのお約束は？

ぽかんとする私を放って、マオは話を続けた。

「我が魔族を統治している世界では、長年人族と魔族が対立しつつも共存してきた。だが五百年前、人族が勇者召還の魔術を開発してから、魔族領に侵攻してくるようになってきた。もちろん、一般的に魔族と人族では魔族の方が強いが、初代勇者は魔王と相打ちになるほどの力を持っていた。魔王が倒され、次の魔王が立つまでの隙に魔族は狩られ、領土は奪われた。それに味を占めた人族は、その後も勇者を召還し、人族の領土を拡大するようになった。幸い、と言っているのか判断しかねるが、勇者召還の魔術には天体の位置が密接に関係していたので、百年に一度しか発動できないのだが……」

一息ついたマオがお母さんの顔を見ると、お母さんは大丈夫よ続けて、という顔で頷いた。

でも私はもうお腹いっぱいって気分だ。受験勉強でそれなりに世界情勢とか経済とか、新聞読んで勉強してるけど、異世界の情勢まで入れる隙間は残ってないよ。容量ちっちゃいんですよ、私の頭！

あ、自分で言っちゃった……。

「もうじき、五回目の勇者召還の時期になる。今回の勇者が我を倒せば、魔族領は全て奪われ、生き残りの魔族は人族に隷属させられるだろう。我は、そうなる前に魔族を率いて逃げだすことにしたのだ。……腰抜けと誹られようと、矜持も誇りも、命あつての物種だからな」

「それは、とても素晴らしい決断だと思うわ」

暗い目をして言うマオを、お母さんが慰めるように肯定した。さすが白衣の大天使。こういう自暴自棄一步手前の人のあしらいが上手いよね。

「でも、ねえ……」

なぜそこで私を見るのお母さん……。そうですね、お母さんが慰め役で、私はけしかけ役って事ですね。

素早いアイコンタクトで理解した私は首をかしげて口を開いた。

「でもさ、日本って難民の移住に厳しい国だよ？」

「難民ではない。移民だ」

頑張って違いを主張するマオをちらつと見てわざとらしくため息をついてやる。

「だって、髪とか青いしさー。まさか羽根とか角とか隠してない？」

「……我には、ない。が」

「ああ、そういう人もいるんだ。やつぱり」

「こちらの人族も魔族を差別するのか」

「差別以前に、こっちには魔族っていないから、角とか羽根とかついてたらみんなびつくりするよ」

そう、地球には知的生命体は人間しかいないし、日本人は大多数が黒髪黒目だ。

羽根とか角とか、差別以前に研究対象になっちゃうよ！ 髪を青く染めてる人はいるけど、自前で青い人とかいないし。

でも、さっきの話だと、このままだとマオとゆかいな仲間達は殺されてしまうらしい。

知り合ったばかりだとしても、押しかけられて結構迷惑だとしても、死なれるのは後味悪いよねえ。

どうしたらいいんだろう。お母さんは何か考えているのかな。

ちらつと視線を送ると、お母さんはお仕事用の笑顔を顔に貼り付けていた。

ノープランってことですね、分かります！

4（後書き）

あるえ？ 話が動かない？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7924u/>

魔王とお母さんと私

2011年11月29日01時59分発行